

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 柴崎秀子

本論文「語彙知識と背景知識が第二言語のテキスト理解に与える影響」は、語彙知識、背景知識、一般的語学力などの読み手要因と、第二言語のテキスト理解との関係のモデル化を試みたものである。

論文は全 8 章から成り、第 1 章は、本研究の第二言語習得研究に占める位置と本研究の概要の記述に充てられ、第 2 章で、第二言語習得の先行研究を研究的に概観し、先行研究の問題点を指摘した。

第 3 章では、本研究がよりどころとする理論として、認知心理学者 Walter Kintsch の理解に関する知見を取り上げる。Kintsch の理論が 1) 言語学習という研究分野をテキスト学習という分野に拡大したこと、2) 理解を意味命題表象で分析し、命題には階層構造があり、ミクロ命題とマクロ命題という異なる命題単位で説明したこと、さらに、3) 理解の表象をテキストベースと状況モデルという 2 つの次元から捉えたことに着目する。本研究は、読解を意味命題表象の構築と定義し、テキストベースを測定する実験方法として再生課題と明示課題を、状況モデルを測定する実験方法として要約課題を採用した。合計 6 つの実験を通して、読み手の語彙知識と背景知識が第二言語のテキスト理解に与える影響を分析する。実験結果と考察が第 4 章から 7 章で詳述される。

まず、第 4 章では、読み手の語彙知識と背景知識が読解のどの水準に影響があるかを明らかにする。日本人大学 2 年生 42 名と高校 2 年生 73 名の計 115 名を対象に実験 1 を行い、再生課題、明示課題、推論課題を課した。その結果、語彙テストの成績に基づく語彙知識は、再生課題、明示課題、推論課題の予測変数であり、背景知識テストの成績に基づく背景知識は問題解決課題の予測変数であることが示された。また、語彙知識、再生課題、明示課題、推論課題の 4 変数の間には双方向で因果関係があり、背景知識と問題解決課題、推論課題と問題解決課題の変数の間にも双方向で因果関係があることが示された。

実験 1 の結果から、以下の 4 点に関するリサーチ・クエスチョン（以下 RQ）を導く。テキスト理解における語彙指導の効果（RQ1）、第二言語のテキスト理解を促進する効果的な語彙（RQ2）、第二言語学習者の背景知識の高低と語彙知識の高低による読解の質の比較（RQ3）、第二言語読解の分析のモデル化（RQ4）、である。

第 5 章では、RQ1 に関連した実験 2 の結果、①未知語を多く含む命題部分の

理解には、語彙リストは十分な効果がある、②語彙リストの有無に関わらず、背景知識が豊富な内容は再生しやすく、背景知識が少ない内容は再生しにくい、③未知語の推測ができる読み手は、できない読み手よりも背景知識を多く持つ、④語彙リストは、文の長さ、項の数などのテキストの読みにくさを軽減する、⑤読み手の背景知識に誤概念がある場合、語彙リストがあっても誤概念によるバグは解消されない、ことが明らかになった。

ついで、RQ2に関わる実験3では、母語の語の概念と第二言語の語の概念が重なり、母語と概念にリンクがある場合に、第二言語の母語訳を与えることは第二言語のテキスト理解に効果があるという結果が得られた。また、母語訳は命題の数を増やすが、テキストベースや状況モデルの構築にいたる効果が得られないことが分かり、母語訳を与えるという語彙指導の限界が示唆された。

第6章では、RQ3に関わる実験4と実験5が報告される。実験4は、読み手の背景知識の高知識群と低知識群の理解を比較する。再生課題には有意傾向が見られた。特に問題解決課題に顕著な差が見られ、要約課題でも有意差が示された。実験5は、語彙知識の高知識群と低知識群の理解を比較する。再生課題と明示課題で有意差が示されたが、推論課題と問題解決課題では有意差が示されず、要約課題では、有意傾向が示されたに過ぎなかった。実験4と実験5から、語彙知識は命題のマクロ化への貢献度が低く、背景知識は命題のマクロ化に貢献することが示唆された。

第7章では、RQ4に関して実験1から実験5の結果を統合し、実験6を行った。読み手要因として、語彙知識、背景知識、一般的英語力の3変数、理解の水準として、テキストベースと状況モデルの2変数、計5変数の間で計5回の重回帰分析を行い、その相互関係をパス図として示した。その結果、次の結果が得られた。①テキストベースと状況モデルは双方向で強い因果関係を持つ、②語彙知識、一般的語学力、テキストベースは双方向で強い因果関係を持つ、③語彙知識は状況モデルの予測変数である、④背景知識は状況モデルの予測変数である、⑤語彙知識と背景知識の間には因果関係はない。

特に結果⑤は、長年読解研究で支持されてきた、語彙知識と背景知識は相互補完するという主張に矛盾する結果を呈した。この点に関して、本研究は、読み手のパフォーマンスの外側からの観察ではこの2つの知識が相互補完するよう見えるが、読解プロセス、つまり読み手の心内では、語彙知識と背景知識が相互補完するのではなく、テキストベースと状況モデルが双方向で因果関係を持つことが読解を成立させるのであろうと推論する。

第8章では、本研究の概要をまとめ、今後の課題を述べる。今後の課題として、第二言語のテキスト理解と読み手知識の関係のモデル化の実現には、先述

のパス図に読み手の母語の読解力や第二言語の作業記憶容量を変数に加えることが必要であるとする。ただし、そのためには、読み手の母語の読解力の測定方法の選定という課題があるとする。

以上が本論文の概要である。第二言語のテキスト理解に焦点をあてた研究はまだ少なく、その意味で、本研究の当該研究領域への貢献と学問的意義は大きい。実験6のパス図から、未知語が多いテキスト理解において背景知識が豊富で良質の状況モデルが構築できれば、そこからテキストベースを修正することが可能であり、一方、背景知識が乏しく状況モデルが良質でない場合も語彙知識から良質のテキストベースが構築できれば、そこから状況モデルを修正することが可能であろうということが示唆され、第二言語のテキスト理解における語彙知識と背景知識の位置づけを明らかにすることに貢献した点が最も評価に値する。また、第二言語の習熟度が読みの過程が自動化するレベルまで達していれば背景知識の活性化が起こりやすく良質の状況モデルが構築されるであろうとし、読み手の習熟度が第二言語のテキスト理解に果たす役割についても実証的に論じている。語彙知識、背景知識と言語の習熟度が第二言語のテキスト理解の主要な要因であることを、周到に計画された一連の実験を通して段階を追って実証的に明らかにした手法は、本審査委員会委員より高く評価された。とりわけ、先述のパス図は、第二言語のテキスト理解と読み手の知識との関係のモデル化の実現可能性を示唆するものであり、今後の著者の研究成果が大いに期待される。

とはいえ改善の余地が全くないわけではない。審査では、いくつかの指摘がなされた。まず、第二言語読解の語彙知識に関連して、既知語率の閾値に関連させた議論がなされてもよかったこと、状況モデルは母語を介してのみ構築されると言い切ることは可能かということ、また、語彙知識と背景知識の間に、本研究が主張するほど明確な線引きが可能であるかなどである。今後の課題である第二言語読解のモデル化に向けて、テキスト要因の変数の扱いについての指摘があったことも記しておく。しかし、これらの指摘は、本研究の根幹を左右するようなものではなく、また多くは著者の将来の研鑽に期すべきことからであり、本論文の大きな学術的貢献をいささかも損なうものではない。

以上の理由により、本審査委員会は本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。